

個別事業の進捗について

- 目次 -

- 1．東島における外来ネズミ類駆除後の生態系回復（環境省）
- 2．母島におけるグリーンアノール対策と昆虫の回復（環境省）
- 3．父島におけるノヤギ対策の取り組み状況（環境省、東京都、小笠原村）

東島における外来ネズミ類駆除後の生態系回復

1. 経緯

東島では2006年に、クマネズミによる海鳥に対する食害が確認され、特にアナドリでは繁殖個体群に壊滅的な影響が生じた。また、オオハマギキョウにも食害がおよび、2007年には開花した株が見られない状況となっていた。こうした生態系に対する悪影響を回避するため、2008年8月と2010年2月に、殺鼠剤（ダイファシノン製剤）のヘリコプターからの空中散布による駆除を実施した。



2. 駆除実施後のネズミ類生息状況

駆除実施後、様々な手法（わな捕獲、噛み跡トラップ、足跡トラップ、ヘアトラップ、センサーカメラ調査）によってネズミ類の生息状況のモニタリングを行っている。2008年の駆除実施以降、ネズミ類の生息を示す証拠は全く見られていない。駆除実施後3年間ネズミの生息が確認されておらず、根絶に近い状態であると考えられる。

3. 外来ネズミ類駆除後の生態系の回復

海鳥類

2009年以降、ネズミ類による食害は見られなくなり、現在全島においてアナドリの繁殖個体が確認されている。

年度	アナドリの繁殖状況
2006	0.035haの調査区内で、237羽、61卵の食害を確認、全島では1,000羽以上が食害されたと考えられた
2007	同調査区内でふ化個体は確認されず、
2008	多数の食害死体を確認
2009	同調査区内で数羽のヒナを確認、食害
2010	の発生無し



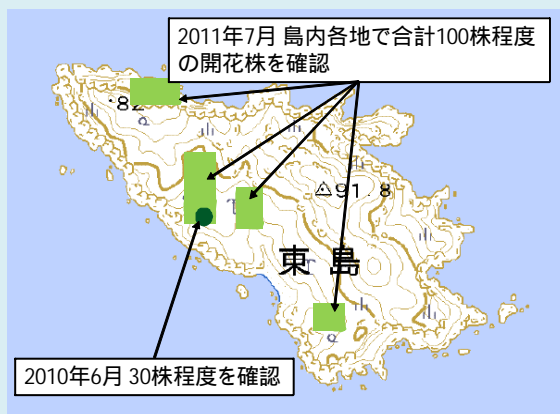
東島での巣立ち間際のアナドリのヒナ

2010年9月撮影

写真及びデータ提供：小笠原自然文化研究所

オオハマギキョウ

2010年に駆除後初めて開花株が確認され、2011年には株数が大きく増加し分布が拡大した。



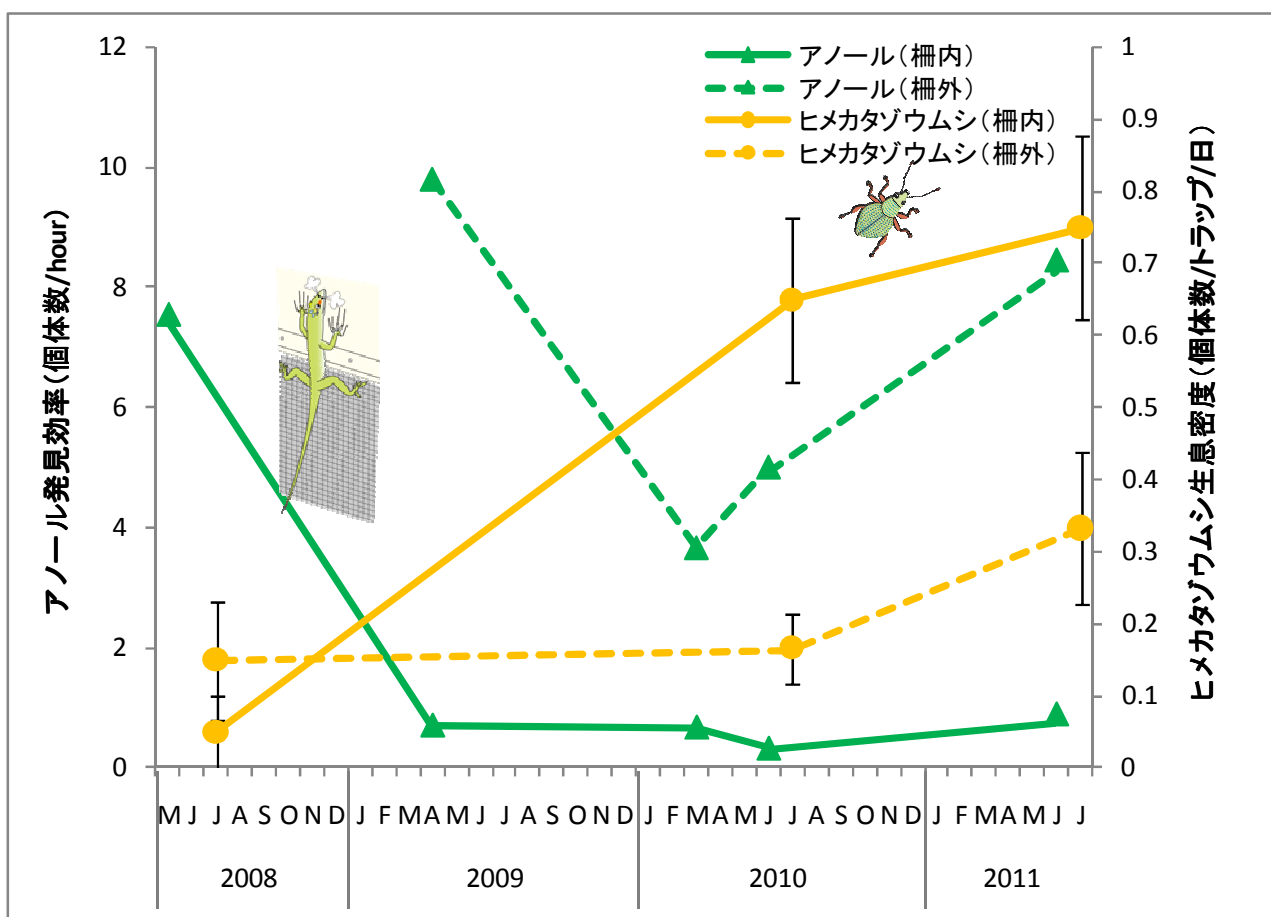
2011年7月撮影

母島におけるグリーンアノール対策と昆虫の回復

2008年3月に母島新夕日ヶ丘にグリーンアノールの侵入を防止するための柵を設置した。柵内のグリーンアノールを粘着トラップを用いて駆除し、昆虫相の回復を目指している。柵内のグリーンアノールの低密度化の成功に伴い昆虫の回復が見られ始めているので、その1例を紹介する。



グリーンアノールとヒメカタゾウムシの生息密度の変化



● 結果・考察

- ▶ 柵内においてグリーンアノールを低密度に抑えることを継続することができている。
- ▶ 柵内におけるヒメカタゾウムシの生息密度が増加し、その傾向は継続している。
- * 移動能力が乏しい昆虫ほど、柵内外をはさんだ移動が少ないため、グリーンアノール排除による効果が現れやすいと考えられる。
- * ほかに、草原に生息する昆虫(ウンカ、バッタなど)の調査においても柵内で増加傾向がみられている。

● 調査方法

1. グリーンアノール

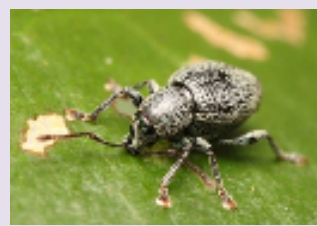
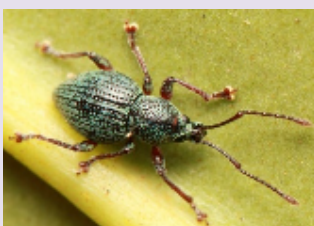
- ▶ 自然再生区内外に類似の環境を3カ所ずつ(林縁、林内、草原)(※上記グラフでは全体の平均を示した)
- ▶ 1調査地あたり30分間の調査を3回実施し、発見効率(N/hour)を指標とする。

2. ヒメカタゾウムシ

- ▶ ウラジロエノキの20~30cmの枝を5本束ねてヒメカタゾウムシの食痕がある樹木に吊るす。柵内3地点 柵外3地点 各地点20トラップ。(※グラフでは全体平均を示した)
- ▶ 1日後、網の中でトラップを振り、網の中に落下したヒメカタゾウムシの個体数を記録した。

※ ヒメカタゾウムシ

- ▶ 小笠原諸島に生息する固有属のゾウムシ。
- ▶ 小笠原諸島内において多くの種に分化した。
- ▶ 飛翔能力がなく、移動手段は歩行のみである。



平成 23 年 9 月 29 日
環境省小笠原自然保護官事務所
東京都小笠原支庁
小笠原村

父島におけるノヤギ対策の取り組み状況について

聳島列島及び父島を除く父島列島においてノヤギを根絶したため、環境省及び東京都は、平成 23 年 1 月より父島においてノヤギ排除に着手した。

また、小笠原村は農業被害対策としてのノヤギ排除を平成 4 年度から継続して実施している。

平成 22 年 4 月～平成 23 年 7 月までのノヤギ排除状況 (単位：頭)

	排除頭数	排除手法別		
		銃器	罨	追い込み
環境省	66	62	4	
東京都	261	132		129
小笠原村	326	281	45	
合計	653	475	49	129

排除状況 (追い込み捕獲、南袋沢周辺)

